第 14 回　埼玉輸血フォーラム

開会あいさつ

埼玉県合同輸血療法委員会　代表世話人　　石田　明

私は、埼玉県合同輸血療法委員会の代表世話人を務めております埼玉医科大学国際医療センター輸血細胞移植部の石田でございます。昨年もここで同じような、ご挨拶をさせて頂き、早一年が経ちましたが依然としてコロナの不安が続いており、今回もウェブ開催にさせていただきましたことをご理解願います。

では、本日は内容が豊富なので、早速プログラムのご紹介をさせていただきたいと思います。プログラムをご覧ください。

本日、最初のセッションは、看護師向け教育セッションで、すでに終了いたしました。

座長には委員会の世話人で埼玉協同病院看護部内科病棟の木村秀実先生にお願いいたしました。このセッションは輸血に関わる看護師さんに一人でも多くフォーラムに参加していただきたいと、そういった願いで昨年から開始したものです。

二番目のプログラムは、「合同輸血療法委員会」からの報告になります。

座長には委員会の世話人であり、自治医科大学附属さいたま医療センターの心臓血管外科山口敦司先生にお願いしております。今年度もコロナ禍で充分な活動が行えませんでしたが、あくまで各県内の医療関係者と直接対峙しながらお互いの輸血レベルを輸血の質を向上させていくということを目指して活動をしてまいりました。

三番目は、「パネルディスカッション」になります。毎年一番人気のあるセッションです。座長には委員会の世話人で埼玉医科大学総合医療センター輸血部の山本晃士先生にお願いしております？今回は、輸血インシデントがテーマになっております。どういうインシデントが飛び交うのか、どういうふうに対応するのか？「どうする？山本」という気持ちで皆さん聞いていただければと思います。

四番目のセッションは、「訪問診療と在宅輸血」というテーマでシンポジウムを企画いたしました。座長には委員会の世話人で上福岡総合病院の院長でおられます井上達夫委員にお願いしました。講師としては二人先生をお招きしました。東京都立墨東病院の輸血科の藤田浩先生です。藤田先生は、東京都輸血療法研究会の代表世話人を務めておられる上に、昨年は日本輸血細胞治療学会の秋季シンポジウムの会長を務められ、まさに日本を代表する輸血のプロフェッショナルでいらっしゃいます。しかし、その傍らで在宅輸血と聞けば、その在宅輸血施設に行って研修会を開かれるといった細かな活動もしている先生でおられます。

ええもうひとかたの先生はトータス往診クリニックの院長であります大橋晃太先生です。大橋先生は私の知る限りでは在宅輸血の国内で一番質の高い在宅輸血を実践しておられる。まさに在宅輸血のエキスパートでおられます。この二方のお話が同時に聞ける今日は非常に貴重な機会でありますので、是非、在宅輸血に興味のある方はお聞き逃ししないようになさってください。五番目の最後のプログラムは日本におけるヘモビジランスシステムの発展と課題というテーマで、埼玉医科大学国際医療センター輸血細胞移植分の松岡佐保

子先生に教育講演をお願いしております。座長は委員会の世話人で埼玉医科大学病院輸血細胞移植部の岡田義昭先生にお願いしております。ヘモビジランスというのはちょっと難しい言葉ですけれども、ヘモというのは血液、ビジランスというのは監視という意味です。最近、強盗事件なども多くて、物騒な世の中になっています。強盗事件の現場を探してもなかなか犯人が捕まりませんが、最近では各所に様々な監視カメラが設置されており、監視カメラで追っていくことによって犯人が捕まっていきます。ヘモビジランスというのは献血から輸血に使用されるまでは、ガラス張りにして監視していることで輸血副作用の謎を解明して行くと言う非常に興味深いシステムであります。

輸血副作用に関して詳しくない方でも非常に興味深く聞いていただけると思いますので、是非、視聴していただければと思います。今日は非常に天気が良く、もう春になってきました。この仲間分け。世の中気持ちの中でももう春が、そこまで来ています。輸血という列車に乗ってショートトリップをこれから３時間半の時間をかけて楽しんでいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。最後になりますが、このフォーラム開催にあたって、そのプログラムの作成から会場の設定まで関わってくださいました。埼玉県赤十字血液センターの方々に深く御礼申し上げます。以上です。